

書齋を「牢獄(ろうごく)」に見立て、原稿用紙との格闘にすべてをささげた山崎豊子さん(享年88)。同時代を生き、ホームドラマを通して社会にもの申してきた脚本家の橋田壽賀子さん(89)は「世界中がきな臭い今、せせこましい恋愛や不倫を書いている場合じゃない。山崎さんは大上段に振りかぶって日本人そのものを描いた。必ず、心ある人に読み継がれていく」と話す。

山崎さんの絶筆は、死去後の今年2月に刊行された『約束の海』だ。顔のない時代や組織が個人を押しつぶす不条理を書いてきた山崎さんが最後に挑んだのは、従来の山崎文学なら最大の敵役になったはずの自衛隊、つまり事実上の軍隊だった。



前作『運命の人』(2009年)の執筆中から原因不明の全身痛と闘っていた山崎さんが新潮社の編集者、矢代新一郎さん(50)に「自衛隊を正面から書く」と告げたのは10年1月だ。しかし翌年9月に粗筋を示すまでの間、「やはり無理」と何度も断りを入れた。その理由は体調面だけではなかった。

秘書の野上孝子さん(74)が明かす。「先生は『大地の子』などを通じて、戦争が無辜(むこ)の個人をいかに苦しめるかを一貫して書いた。しかし領土問題の緊張を前に、単に戦争反対や軍備増強反対の一边倒でいいのか分からない。確信のないまま自衛隊に踏み込むかどうかを苦悩していた」

過去の戦争や大事件については、「許せない」との座標軸を明確にできた。ところが、自衛隊の望ましいあり方は現在進行形の問題だ。それでも“残り時間”を考慮したのか「『戦争をしないための軍隊』を読者の皆さんと一緒に考えていきたい」と筆を執った。



『約束の海』の時代は1989年、海上自衛隊の潜水艦に乗り組む主人公の若きエリート士官が遊漁船との衝突事故に遭遇、多大な犠牲に立ちすくむ。複雑微妙な事故や海難審判が映像のごとく描写され、憎々しげな悪役の姿もファンにはたまらないだろう。主人公は、かつて真珠湾攻撃に参加して日本軍の捕虜第1号となった父の沈黙に思いを致すうち、米軍の原子力潜水艦へ訓練のため派遣されると決まる。ここまでの第1部が完成しており、構想されていた2部と3部は粗筋のみ単行本の末尾に収録された。



山崎さんは小説に取り込む予定だった04年の中国原潜による領海侵犯事件をどう扱うかに難渋していたようだ。文芸評論家の川村湊さん(63)は未完に終わったことを惜しみつつ「『戦争をしないための軍隊』とは抑止力、つまり相手より**高度な兵器を持つべきだとの流れにならないか。**自衛隊が原潜を導入する話になれば現政権に棹(さお)さし、『平和は大切』との結論が付け足しになってしまう」と危惧する。

矢代さんは原潜導入の筋を否定したうえで「震災での救援活動で自衛隊への感情が良くなるといった『情緒』は駄目で、もっと実質的な議論を考えていたはず」と分析する。

山崎さんは絶筆で初めて、日本人が歩むべき道を読者に委ね、“牢獄”を出て行った。「『意見を持って』が先生の遺言だと思う」。伴走した矢代さんは静かに語る。 【鶴谷真】